

7. 翻訳から見る「万宝山事件」の文学的な形象化

——李泰俊『農軍』の日本語訳を中心に——

朴弘

名古屋大学大学院

1931年に当時の「満洲」の「万宝山」地域（現中国吉林省長春市あたり）で起こった中朝農民衝突事件、所謂「万宝山事件」が民族と外交問題にエスカレートしたことで、日本・中国・朝鮮3つの地域から注目され、その事件をモチーフにした文学作品も少なくない。本発表で取り上げる作品『農軍』は「万宝山事件」を素材とした朝鮮語作品に該当する。

作品『農軍』は当時朝鮮文壇の中堅文学者——李泰俊によって執筆され、1939年7月に朝鮮語雑誌『文章』で発表された短編小説である。ただし、ここで注目すべきなのは小説『農軍』が、雑誌『文章』に発表されたのち、時間をあけず、1940年と1941年にはそれぞれ違う翻訳者によって2回日本語に訳されていることである。これは、他の「万宝山事件」を扱った小説作品に見られない現象である。1940年の日本語訳『農軍』は『朝鮮小説代表集』に収録され、1941年の日本語訳は李泰俊短編小説集『福德房』に収録されている。即ち、李泰俊の『農軍』は文学の視点から、もう一つの「万宝山事件」を再現したのみならず、日本語の世界では翻訳を通して文学形象化された「万宝山事件」を受容されたと言える。

その上、1941年日本語に翻訳された李泰俊短編小説集『福德房』の「跋」の中で、執筆者の張赫宙は「以前の訳は失敗であった」と評価し、『農軍』の二つの日本語訳の差異と指摘したのである。こうした原作とほぼ同時に訳された作品に対して、本発表では当時の朝鮮と日本の文壇状況を念頭に置きながら、二つの訳されたテキストを具体的に比較し、その差異を検討する。それによって、「満洲」で起こった「万宝山事件」を形象化した朝鮮語の作品が日本語に翻訳された効果や意味を論じてみる。